

# 薄 原 村 (厚原村)

(都 留 市)

薄原村は、都留市の中心部(谷村)より北西へ約一キロメートルのところにあつて、大幡川と桂川の合流付近に位置する。村名の「薄」は「うすし」で、村の發展上好ましくないとして、明治初年に厚原村と改称した。

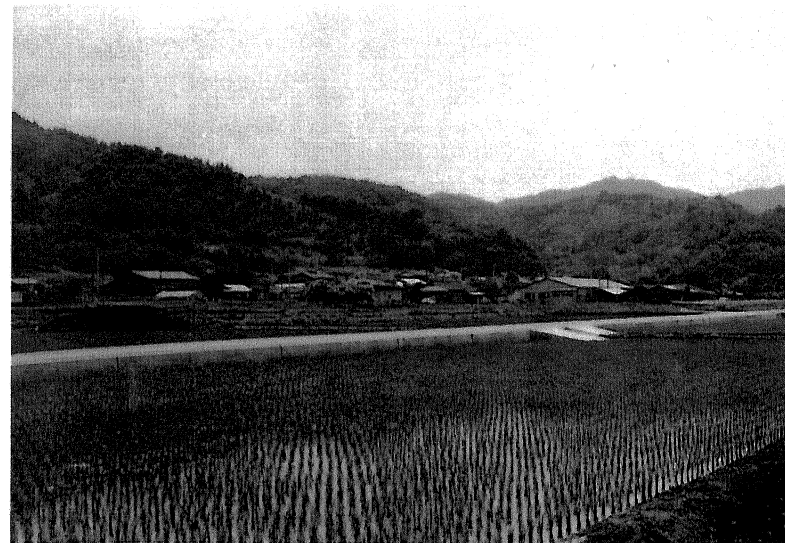
集落は、六一三〇メートルの「カクボ山」・「大久保山」の北面裾野に広がるなだらかな斜面に、村絵図とはほぼ同じように存在する。『甲斐国志』によると、村高四三石四斗四升六合、戸数一五戸、人口四七人(男二一・女二六)、馬四疋の村で、村高・戸数とも少なく、郡内の中では小村に属する。ちなみに、昭和五十五年の国勢調査による世帯数・人口は二二世帯・九六人(男五二・女四四)である。

『甲斐国志』によると、東は「桂川ヲ限り、東南ハ牛石山ノ峰ヲ境」にし、「カクボ山ヨリ三頭・大久保山」を境にして川棚村・十日市場村と界するとあるが、実際には十日市場と境をなさない。そして、西は「大久保・西堀ヨリ加畑川ニ至リ」平栗村と界するとあるが、村絵図上では、平栗村との境に「加畑川」・「から堀」を確認することができる。『甲斐国志』で「大久保」とあるのは地字名であるが、「西堀」は地字名ではなく、村絵図上の「から堀」を指すものと考えられる。北は「大幡川ヲ隔テ」中津森村・金井村と接するとあるが、村絵図上では「大幡川」・「金井村境」は記されているが、「中津森村」の村名は記されていない。なお『甲斐国志』には、「此ノ村水ニ乏シ、僅ニ一井ヲ穿チテ衆口ヲウルホス」とあるが、その井戸は「村絵図」上でも、「村用水ノ井戸」として描かれており、それは集落のほぼ中央部にあったことがわかる。現在、この井戸は埋められてしまい、その場所は道路になってしまっている。

薄原村と他村とを結ぶ道は、川棚村へ至る道、金井村と中津森村との境辺へ出る道、平栗村への道、そして、牛石原を抜けて院辺橋を渡り、下谷村へ至る道などが村絵図に描かれている。そのなかでも、とりわけ現在の道と大きく異っている道がある。それは、院辺橋を渡って下谷村へ至る道で、現在の院辺橋は大幡川と桂川が合流する合流点よりも下流にあるが、村絵図に描かれている「院辺橋」は、大幡川が桂川と合流する合流点よりも少し上流に架けられていたことを示している。

現在の院辺橋は昭和三十四年に架けられたものであるが、その前の橋は現在の橋よりも少し下流の羽根子よりの所にあり、釣橋であった。村絵図に描かれている橋は、現在の橋よりも上流に位置し、しかも桂川が大幡川と合流する地点よりも上流にあった。古老の話によると、その橋に至る川底近くまで下る小道が以前にはあったというが、その小道を現在確認することはできない。

薄原村の人々が、下谷村へ出る時にはこの院辺橋を渡り、上谷村へ出る時には川棚を通る道を利用したという。なお、この橋は、江戸時代には「下谷村・薄原村組合」で管理し、修理の時には幕府からその普請費用が下付される「御普請」橋であった(文化三年「村内明細書上帳」)。



牛石より厚原の集落を望む

村絵図には、集落の北部に「熊野権現」が描かれている。



熊野神社境内にある道祖神

るが、この熊野権現について『甲斐国志』は、「社地縦三間・横二間、見捨地神領除地二畝余、並ニ神主宅地二畝歩、神主川上山城、祭礼三月十二日」と記す。現在、熊野権現は集落の南側の山裾に移され、絵図に描かれている位置にはない。山裾の高台に熊野権現が移されたのは、元の場所は集落の位置よりも低い所であったため、神様が低い所にあるのはまずいということで、集落よりも高い場所に移したと伝えられている。現在の場所に移した年代は明らかでないが、明治維新後のまもない時期であったのかもしれない。なお、元の場所には大きな樺の木が五、六本あったという。現在、その場所に紅葉の木があり、その傍には、昭和二十一年に建てられた「開田記念碑」がある。

ところで、『甲斐国志』に「神主宅地二畝歩、神主川上山城」とみえる神主川上家は、周辺村々七か村・一〇社の神主を勤めた家であるが、現在、子孫の直井公子氏は東京都世田谷区に住まれ、吉田家からの神道裁許状など三〇点の資料を伝える。

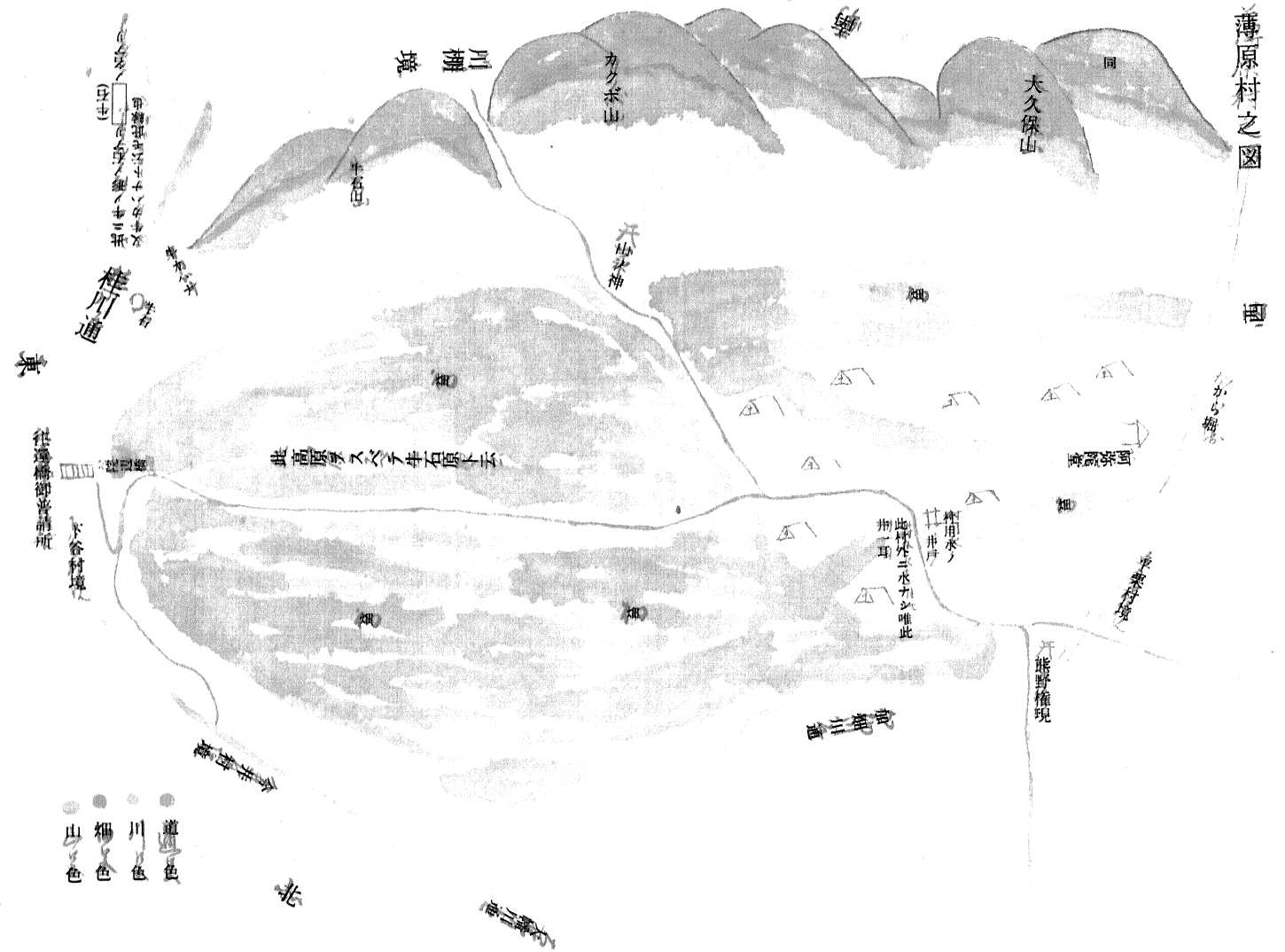
村絵図には「山ノ神」・「阿弥陀堂」が描かれているが、そのうち「山ノ神」は現在も祠られているが、「阿弥陀堂」はない。阿弥陀堂について明治四十五年生れの古老に聞いても、それがあったことを知らないという。延享二年（一七四五）の「郡内領村々御朱印除地寺社由緒書」（渡辺洋男家文書）によると、阿弥陀堂は金井村の用津院が管理し、阿弥陀堂敷地として「縦九間・横拾七間」の「見捨地」と「畑二畝百拾坪程」の「見捨地」があった。また、村絵図では、村の東南端に「牛カハナ」という所があり、桂川には「牛ノ形ノ石」があると記され、こうしたことから、牛石の地名や牛石山の山名がついたとしている。

江戸時代の薄原村は、村高四三石四斗四升六合、反別一一町八反二五歩、家数一五戸の村で、その耕地のすべては畑で、田はまったくなかった。その畑の多くは「牛石原」にあり、そこへは平栗村・加畑村の人々も出作りしていた。そうした「皆畑」の村での農業の合間には、男は「株・薪」を取り、女は「蚕を飼」って、機を織るという生活をしていた。そして、助郷は甲州道中白野・阿弥陀海道・黒野田宿へ勤めた（文化三年「村内明細書上帳」）。

ところで、「牛石山」の北に広がる「牛石原」は、江戸時代は村絵図にみられるように畑であったが、現在、山を越した十日市場から用水を引いて水田となっている。この用水工事は、山腹を掘削して隧道を通すという大工事で、平栗村・薄原村の人々による江戸時代からの悲願であったが、それが完成したのは大正

十五年であった。江戸時代における用水工事は天保四年（一八三三）に計画されたが、成功せず、その後明治三〇四年に掘抜通水工事の計画が立てられるが、これも成功しなかった。

そして、明治二十六年（一八九三）に青柳有之が発起人となり、川上芳太郎・白須慶仲・森嶋治良の三名が保証人となり、大倉組に依頼して柄杓流川ひしゃくながしよりの取水口工事・トンネル工事を行ったが、資金の欠乏などにより工事中止のやむなきに至った。その後、大正七年（一九一八）、耕地整理組合が認可され、同八年には「南都留郡宝村大字平栗・厚原耕地整理組合工事設計書」が作成されて工事が始まり、関東大震災や暴風雨などの被害をうけながらも、大正十五年に事業の完成をみたものである（宝南水利組合『平栗・厚原堤の歴史』奥秋宅也家文書）。



右は当村鹿絵図差上申候以上

甲州都留郡薄原村

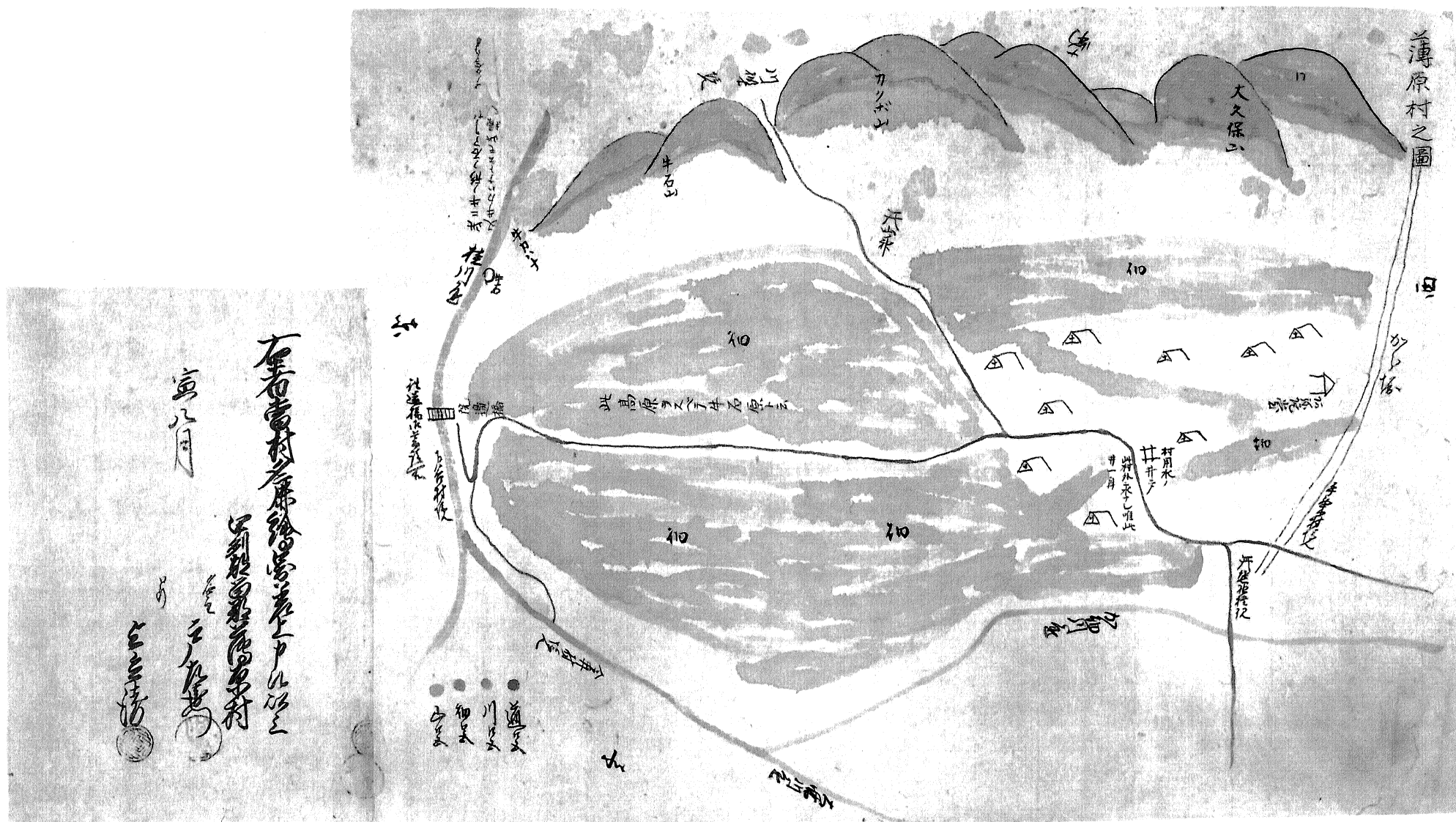
名主

戸左衛門 印

同断

与兵衛 印

寅八月



11 文化3年(1806)8月 薄原村絵図(厚原村) 都留市蔵(森鳴家文書) 276×806

二 文化三年（一八〇〇）八月 薄原村（厚原村）村内明細書上帳

〔表紙〕 文化三年

〔巻頭〕  
「神主山城書付」  
村内明細書上帳

實八月 薄原村

寛文九酉年秋元但馬守様御檢地御水帳式冊  
村高四拾三石四斗四升六合 烟方 薄原村  
此反別拾耆町八反廿五歩

白野 甲州道中阿弥陀海宿へ助郷  
黒野田

御高札三枚  
当寅年  
家数拾五軒

人数四拾七人 男貳拾六人 内女貳拾六人  
神主耆人 馬四疋

一下谷村・薄原村組合桂川通往還橋御普請所有之

一 当村用水路無之、井戸水相用申候

一 男女稼 男ハ農業之間祿・薪を取申候  
女ハ蚕を飼、機稼仕候

一 産物 絹紬織出申候

見捨地 金井村  
一 竪九間 阿弥陀堂敷地 用津院持  
一 横拾七間

右同断  
一 畑貳百拾坪 阿弥陀免 同寺持

是は右寺より書上申候

一 ほか式社 内耆社 山ノ神  
熊野權現

一 当村より 谷村へ拾九町江戸へ貳拾五里  
甲府へ拾耆里

一 神主耆軒 京都吉田様配下 川上山城

右之外、当村ニは古跡・名所・古書物類、前々咄伝仕候  
儀一切無御座候、右御尋ニ付奉申上候通相違無御座候、  
以上

甲州都留郡

〔文化三年〕  
寅八月

薄原村

名主

戸左衛門 ⑩

組頭 与兵衛 ⑪

甲府

御役所

○「甲斐国志編纂資料 明細書上書類 村里之部 亥」より。  
（富士吉田市 加々美四郎家文書）